黒い風琴

富士川英郎

小澤書店

黑い風琴　　定價二八〇〇圓

昭和五十九年四月二十日　初版發行

著　者　富士川英郎

發行者　長谷川郁夫

發行所　株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二―五―一二　郵便番號一〇二

電話　東京(〇三)二六三―九二一八(代表)

振替　東京八―四四七四五

印刷　精興社　製本　大口製本

©H. Fujikawa, 1984　Printed in Japan

黒い風琴　目次

生田春月編『泰西名詩名譯集』 7
生田春月の譯詩 20
生田長江の譯詩 37
茅野蕭々の譯詩 52
石川道雄の譯詩 68
小松太郎譯『人生處方詩集』 87
大山定一譯『ドイツ詩抄』 102
堀辰雄の譯詩 115
平田禿木『近代英詩選』 129

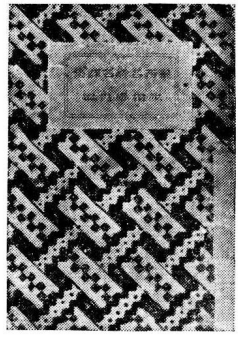
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

竹友藻風『希臘詞花抄』 143
西條八十『白孔雀』 158
矢野峰人『しるえっと』 176
日夏耿之介『唐山感情集』 190
忘れ難い譯詩 207
あとがき 225

黒い風琴

譯詩ものがたり

生田春月編『泰西名詩名譯集』



生田春月編『泰西名詩名譯集』は大正八年四月に越山堂という書店から出版された詞華集である。いつぞや河盛好藏さんがこの詞華集をそのむかし愛讀したと書いておられたが、河盛さんあたりから、下っては私などに至る世代の多くの者にとって、この詞華集はいろいろななつかしい思い出のある詩集なのだと言えよう。

こんにちならばこの種の詞華集はたくさんあって、むしろその選擇に迷うほどであるが、私が舊制中學の上級生になって、いろいろな詩集を讀み漁っていた頃には、さまざまな譯者によって翻譯された西洋のさまざまな詩人の詩を一册のうちに收めている詞華集は、この『泰西名詩名譯集』のほかにはなかったのである。

こんにちの文庫本とほぼ同じぐらいな大きさの袖珍型のこの詞華集を私が初めて讀んだのは、たまたま兄の藏書のなかにこの本を見い出したときのことである。それは

大正十三年のことで、私は舊制中學の四年生だった。この詞華集のうちには、「古代の希臘印度の詩人より現今の未來派、立體派、イマジスト等に至るまでの總數百三十四人」の詩人たちの詩が、二六四頁ばかりの、二段組みの紙面に、ぎっしりと詰っているが、それらの詩人たちは、「英吉利」「亞米利加」「佛蘭西」「白耳義」「プロヴンス」「獨逸」「墺太利」「匈牙利」「伊太利」「西班牙」「露西亞」「丁抹」「諾威」「瑞典」「希臘」「印度」「波斯」「猶太」の部門に分って配置され、このうちには印度やペルシャなどのように、西洋以外の國の詩人たちも加っているのである。

生田春月はこの詞華集を編むに至った經緯を、その序文のなかで述べて、彼が「十七八歳の時分より、數年間に亘つて、或は圖書館に於て、或は自分の書物、友人の書物中に於て、隨時目に觸れた譯詩中、特に自分の氣に入つたものを丹念に拔粹した」ノートを基にして、この詞華集ができあがったのだと言っている。そして彼はさらに語をついで、その三册のノートは、「未だ語學力を有しなかつた當時に於て、私の虎の卷であり、私の詩人としての修養の基礎をなしてゐる貴重なる文書である。而してまた私がいかばかり熱心な詩の使徒であつたかを最も雄辯に語る記錄である。私はこれを居常座右より放さないで愛したものであつた」と述べているが、そのような「熱心な詩の使徒」であった若い頃の彼によって、ひそかに書き寫され、書きためられた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ものであったからこそ、換言すれば、この『泰西名詩名譯集』は單にこの種の詞華集として最初のものであったばかりでなく、ひとりの若い詩人が並々ならぬ愛情を以て編んだ詞華集であったからこそ、六十年後のこんにちも、多少その色香はあせてしまったとはいえ、なおその魅力を失っていないのだと言うことができるだろう。

この詞華集の開卷第一頁には、シェクスピアの「オフィリヤの歌」の「その一」として

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある
貝の冠とつく杖と
はける靴とぞしるしなる

かれは死にけり我ひめよ
渠はよみぢへ立ちにけり
かしらの方の苔を見よ
あしの方には石たてり

柩をおほふきぬの色は
高ねの雪と見まがひぬ
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ

という森鷗外譯の詩が置かれ、ついで坪内逍遙譯の

あすは十四日ヴレンチンさまよ
門へ行こぞや　引明方に、
ぬしのお方になろずもの。
それと見るより門の戸あけて、
ついと手を取り引入れられたりや
純潔な處女ぢや戻られぬ。

ほんに思へば、思へばほんに、

なんぼ殿御の習ひぢやとても
それはあんまりどうよくな。

おれも誓文(せいもん)その氣でゐたが
一夜(ひとよ)寢て見て氣が變つた。

という詩や

戀し、懷(なつか)しロービンさまよ……
歸らしやんせぬかいな？
歸らしやんせぬかいな？
……

という詩が、それぞれ「その二」及び「その三」として、それに續いていた。そしてその次には

燕も來ぬに水仙花
大寒こさむ三月の
風にもめげぬ凜々しさよ。
……

という上田敏譯の「花くらべ」という詩が掲げられていたが、シェクスピアの俚謠の右の巨匠たちによる典雅であるとともに、くだけて、輕快な譯詩は、その當時すでに『マクベス』や『ヴェニスの商人』などを翻譯で讀み嚙って、私が思い描いていた劇作家シェクスピアとは別な抒情詩人シェクスピアのあることを、強く印象づけてくれたと言ってもよい。いずれにしても、これらのシェクスピアの譯詩は讀者をこの『泰西名詩名譯集』の世界の中へいつ知らず引き入れてゆく魅力をもっていたが、この詞華集の「英吉利」の部門には、シェクスピアのほかに、さまざまの英詩人の詩の、上田敏、蒲原有明、小林愛雄、山宮允などによる翻譯が收められており、そのなかにまじって、

暮れ果てゝ、わびしくも、あらしの皐に一人。峰に聽く風の音。岩を下る早瀬、

雨凌ぐ軒端もなく、風吹く皐に一人。

というふうに始まる夏目漱石譯の「オシアンの詩より」も見い出されたのである。だが、この詞華集に收められている詩のうちで、當時の私が最も愛讀したのは「佛蘭西」の詩人、とりわけボードレールとヴェルレーヌの詩であった。

ボードレールの詩では、永井荷風譯の「死のよろこび」や、「吾等忽ちに寒さの闇に陷らん」という「秋の歌」がそこにあり、またヴェルレーヌでは、同じく荷風譯の「ましろの月」や、「ぴあの」や、「空は屋根のかなたに／かくも靜に、かくも青し」という詩のほかに、なによりもあの上田敏譯の「落葉」があった。當時まだ『海潮音』も『珊瑚集』も知らなかった私は、この詞華集によってそれらのフランス象徵詩をはじめて知ったのであり、また、この詞華集に導かれて、私はやがて上田敏や荷風のそれらの有名な譯詩集を手に入れ、それを耽讀するようになったのであった。同じことはまた、堀口大學の譯詩についても言える。『月下の一群』は當時まだ現われていなかったが、私が堀口さんの譯詩のめでたいことをはじめて知ったのは、この詞華集に收められているヴェルレーヌやモレアスやフェルナン・グレークやサマンなどの譯詩によってであったのである。

生田春月はまた、譯詩家としての森鷗外を高く評價していた。そしてこの詞華集のうちに、『於母影』や『沙羅の木』の譯詩はもちろん、いろいろな翻譯小說のなかに挿入されている譯詩の類に至るまで、「極めて零碎なものさへ」も採錄しているのである。私は先年、この詞華集のなかに、それまでの『鷗外全集』にもれていた鷗外譯のゲーテとハイネの詩を一篇ずつ發見して、或る雜誌で紹介したことがあるが、そのハイネの詩は

しづけきよはのちまたには
ゆくひともなしこのいへぞ
わがこひびとのすみかなる
そのこひびとのいにしより
つきひへぬれどかどばしら
むかしながらにたてりけり

たぞやかなたのたかどのに
ふりさけみつつうちなきて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com